



BOOGAMANIA



第四部

013修行

014修了

015帝国

016解任

湖南徹

BOOGAMANIA (013) : 修行

「今日の修行じゃ」

と、ウガラ仙人は偉ぶった態度で宣言した。

――今回の修行はどんな無駄なものなのかな。

と、金田金子はぼやいた。

ウガラ仙人は『修行だ、修行だ』と言っては試練を二年間にわたって彼女に与え続けていたが、『これがウガラ戦士が使うあの奇妙な術とどういう繋がりがあるの?』といったものばかりだった。

本日の修行も、どうせ下らないものだろう。

――炊事? 掃除? 洗濯? 洗車? 芝刈り? 雪掻き? 風呂焚き? 夜のお相手? いい加減、ED爺の相手は疲れるだけで……。

「本日から、本格的な修行に入る。お遊びは終わりじゃ」

金田金子は、目の前の老人を蹴り飛ばす衝動に必死に耐えた。

――お遊びの為に二年も炊事やら洗濯をやらされてたの? 冗談じゃない!

「ここがどこか分かるか?」

金田金子は前方に目を向けた。

「底無し沼ですけど」

ここで何度洗濯や洗い物をしたか。季節に関係なく凍る様な冷たい水で、一〇秒でも手を突っ込むとかじかんでしまう。

全自動洗濯機が当たり前の時代、手で洗濯する事を強いられるとは全く予想していなかった。

――何故スーパー・ウルトラ・セレブのあたしが洗濯なんて……。そんなの、下等なお手伝いにやらせるもんでしょ?

ウガラ仙人は、金田金子の愚痴をよそに、

「さよう。底無し沼じゃ。大西洋に繋がっているとされる」

――んな訳ないでしょ。

ここから大西洋まで、といったら地球を貫通している事になる。

ウガラ仙人は坦々と語った。

「中に入った者は二度と上がって来れん。これまで何人も入水自殺しているが、死体が上がって来た例は一度としてない。底には肉食の水生生物が潜んでいて、死体を食らっている、という噂もある」

金田金子は震えた。

「それは酷いですね」

「そこでじゃ」

と、ウガラ仙人は足元に落ちていた石ころを拾うと、熊野産とされる最高級の筆——実は中国で生産された偽物——で×印を書いた。墨が乾くまで待った後、巨額の予算に物を言わせて大型補強を毎年繰り返しているにも拘わらず成績的にも視聴率的にも低迷が続く巨人軍からスカウトが来るのでは、と思いたくなる程見事なフォームで沼の中心に投げ込んだ。「取って来い」

金田金子は啞然とした。

「あの石を拾って来るんですか？」

「さようじゃ。さっさと取りに行け」

「見付かる訳ないでしょう！ 底無し沼なんだから！」

「この程度の試練に応えられない様では、ウガラ戦士にはなれんぞ」

「試練とかいうレベルじゃない！」

「無理か？」

「無理よ！」

「そうか。では、ウガラ戦士になるのは無理じゃな。世界はブーガブーガ軍団によって征服される。今から『ブーガ』と唱える練習をしておけ。お前の糞親父と同様にな」

金田金子は首を左右に振った。

「それはヤダ」

「だったら石を取りに行け」

「ヤダ！」

「では、今から『ブーガ』と唱える練習をしておけ」

「ヤダ！」

「そうか。どちらとも拒否するのか。では、仕方ない」

と、ウガラ仙人は呟くと、唱え始めた。「UGALA、UGALA、UGALA……」

金田金子は飛び上がった。

「師匠！ 止めて下さい！」

ウガラ仙人は、弟子の懇願を無視した。

踊り続ける。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

ウガラ仙人は唱えながら尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

「師匠！ 止めて下さい！」

と、金田金子は涙を流しながら訴える。

「UGALAボンバァーッ！」

と、ウガラ仙人は叫ぶと、金田金子に向かって両手を突き出した。手から青白い光線が発射される。

金田金子は、光線を顔面に食らった。

二〇メートル後方に弾き飛ばされる。

「ギャッ」

生き絶え絶えの弟子に、ウガラ仙人は何食わぬ顔で接近した。

「石を取りに行け」

「で、でも……」

「UGALAボンバァーッ！」

ウガラ仙人の手から、また青白い光線が発された。

金田金子は、再度顔面に光線を食らった。ヘビー級ボクサーのストレートと同等の衝撃を受け、後方へ吹っ飛ぶ。意識が朦朧とする中、ゆっくりと置き上がった。折れた歯をペッペッと吐き出す。

「石を取りに行け」

「でも……」

「UGALAボンバァーッ！」

ウガラ仙人の手から、また青白い光線が発された。

金田金子は、顎を蹴り上げられたのと同等の衝撃でもんどり打った。痛みで身体が動かせなくなった。

ウガラ仙人は無言でつつかと近寄ると、金田金子の顔面を跨いだ。

ウガラ仙人は薄汚い着物の下には何も着けていなかったのので、金田金子は糞臭を放つ局部を目の当たりにした。

――まさか……。

ウガラ仙人が、思い切り排泄する。

金田金子は、あのしょぼい身体のどこにどう溜めていたのか、と不思議に思う程の排泄物をまた顔面に食らった。避けたくても、身体が激痛で動いてくれない。次から次へと落下する排泄物を顔面で受けるしかない。

排泄を終えたウガラ仙人は、一步下がると、

「石を取りに行け。さもないとまたお前の顔に糞する。まだまだ出せるからの」

「……分かりました」

と、金田金子は呟くと、ふらつく足で沼にまで進んだ。呼吸を整えると、沼に片足を入れる。

これまで洗濯や洗い物の為に両手を突っ込んだ事はあるが、足から入った事は無い。激痛を超えた冷たさが、全身を駆け巡る。後頭部をハンマーで殴られた様な衝撃が走った。

「さっさとせんとそれだけ長引くぞ。底無し沼だからじゃの」

ウガラ仙人が嫌味を言う。

――そんな事知ってるから横でくどくど言うな、糞爺め。

金田金子は両足を水に付けた。冷たさが一層身にしみる。

一步前に出た。

更に一步前が出る。

底無し沼と教えられていたが、今のところ脛が隠れる程度の深さだ。

底無し、というのは糞爺の勝手な妄想で、実際はそうでないのかも、と金田金子は思い始めた

。

もう一步前が出る。

沼底を踏む。

……と思ったら、足がずぶずぶと泡を立てながら沈んだ。

あっ、と呟いた頃には遅く、頭から水中に転落していた。

洗濯や洗い物に使っていたので、水は綺麗だと思っていたが、岸から離れると泥やヘドロが混じるらしく、半メートル先も見えない程濁っていた。

石ころどころか、目の前に出した手を見付けるのにも苦労する。

——こんな中で石ころを拾うなんて無理でしょ！

息が苦しくなり、水面に顔を出し、ゼエゼエと呼吸した。

岸辺に立つウガラ仙人が、

「石ころは見付かったのか？」

「無理です！」

「見付けろ」

「無理です！」

「見付けろ」

「無理です！」

「そうか。仕方ない」

と、ウガラ仙人は呟くと、唱え始めた。「UGALA、UGALA、UGALA……」

「師匠、止めて下さい！」

金田金子は、岸に向かって泳ごうとしたが、寒さで手足が麻痺していて、ろくに動かせない。

「UGALAボンバァーッ！」

ウガラ仙人の手から、青白い光線が発された。

光線は、水面から出ていた金田金子の顔面を直撃した。

衝撃で、彼女は湖底から突き上げられるようにして吹っ飛ばされた。空中で三回転させられた後、高さ一〇メートルから水面に落下した。水飛沫を盛大に散らす。

金田金子は、泡を食って手足をバタバタさせ、水面まで戻った。飲み込んでしまったヘドロ混じりの水を吐き出す。

「石ころは見付かったのか？」

——今はそんな場合じゃねえんだよ。

と、金田金子は反論する代わりに、

「無理です」

「見付けろ」

「無理です」

「見付けろ」

「無理です」

「そうか。仕方ない」

と、ウガラ仙人は呟くと、両手を突き出した。「UGALAボンバァーッ！」

「ヒィィィーッ」

金田金子は光線から逃れようとしたが、無理な話だった。

後頭部に光線を受け、また沼から吹っ飛んだ。水面から二〇メートルの高さで五回転し、真逆さまに落下した。

巨大な水柱を立てて沈む。

必死に水面まで泳ぎ、顔を出した。

「石ころは見付かったのか？」

――石ころなんて知らない！

と、金田金子は反論する代わりに、

「無理です」

「見付けろ」

「無理です」

「見付けろ」

「無理です」

「そうか」

と、ウガラ仙人は呟くと、両手を突き出した。「UGALAボンバァーッ！」

金田金子は青白い光線を顔面に受け、またまた吹っ飛ばされた。

高さ五〇メートルから沼に落下し、水飛沫を上げた。

意識が朦朧とする中で泳ぎながら、彼女は誓った。

――いつか糞爺をぶっ殺してやる。

BOOGAMANIA (014) : 修了

「糞女、出て来い」

と、ウガラ仙人は偉ぶった態度で宣言した。

「はい、師匠」

と、金田金子は、諦めの表情で小屋から外に出た。

今日の修行は何なのか、と。

彼女はこの一〇年間で様々な修行というか、試練というか、虐待を乗り越えてきた。

.....底無し沼に投げ入れられた石ころの回収。

.....アイアンマン・トライアスロン・ワールドチャンピオンシップで優勝。

.....指で釘を打つ。

.....ボストンマラソンで後ろ向きに走って優勝。

.....日本海溝の底で生息するカイコウオオソコエビを素潜りで捕獲。

.....キラウェア火山から流れ出るマグマを身体一つで阻止。

.....バイキングレストランに開店直後に一番槍で入店し、他の客が来店する前に全メニューを食い・飲み尽くして営業終了を強制。

.....東京大学、早稲田大学、慶應義塾大学、京都大学、ハーバード大学、オックスフォード大学、MIT、スタンフォード大学、マサチューセッツ工科大学、イートン・カレッジ、M.V.ロモノーソフ・モスクワ国立総合大学に一発で合格。

.....逆立ちして富士山を登頂。

.....肥溜めを舌で清掃。

.....平泳ぎで太平洋を横断。

.....ノーベル化学賞を受賞。

.....ヤマダ電機とコジマ電機で最新の超大型薄型液晶テレビとタブレットPCが1円になるまで値切り交渉。

-パルム・ドール受賞。
-ピークタイムのマクドナルド吉祥寺店で接客から調理に至るまでの全工程を一人に対応。
-エベレストを這って登頂。
-エフェソスのアルテミス神殿の復元。
-エルニエッタを使った料理の考案。
-両手両足を縛った状態で東京スカイツリーに登頂。
-防護服抜きで原子炉の制御棒を交換。
-一〇〇〇メートル先の蠟燭の火を吹き消す。
-大相撲春場所と夏場所と秋場所と冬場所を全勝優勝。
-壁に開いた直径二センチの穴を通して反対側に抜ける。
-素手でアフロベナトルを捕獲。
-五〇〇〇頭の乳牛がいる牛舎を一人で管理。
-ホワイトハウスのオーバルオフィスに夜間忍び込んで『猫じゃ猫じゃ』と踊る。
-スペースデブリを身体一つで一万点回収。
-ロト6で一等賞を二五回連続して当選。
-演説中のローマ教皇の顔面にマッキーで落書き。
-パミール・バダクシャンと隣国との紛争終結協議を調停。
-ゴビ砂漠に一〇〇〇万本植樹して緑地に変える。
-ブラジルバリストチャンピオンシップで優勝。
-アスワン・ハイ・ダムを指で突きまくって破壊。
-背泳ぎで南極大陸に到達し、逆立ち歩きで横断し、クロールで帰国。

.....三年前に握られ、湿度九〇%の部屋でそのまま放置されていた大トロの握りを六〇人分平らげる。

.....両手を縛られた状態で虎を食い殺す。

.....師匠の友人知人二〇〇名の夜のお相手をする。

.....ヤズデギルド三世の食卓に毒を盛る。

.....ブッカー賞受賞。

.....ドーダーを卵から成鳥まで飼育。

こんな修行がウガラ戦士になる事とどう繋がるの、と思いたくなる試練ばかり。

ウガラ戦士になるのに三〇〇年かかる、というのも当然である。

まともな修行に再編されたら、一年で習得出来るのではないか。

「.....今日の修行は何でしょう？」

と、金田金子は恐る恐る訊いた。

ウガラ仙人は、弟子を睨み付けると、

「修行は昨日で終わった。教える事はもう何も無い。お前は本日からウガラ戦士になろうと思えばなれる」

金田金子は平手を食らった気分になった。

一〇年間にわたってひたすら虐待され続けただけで、『戦士』っぽい訓練は何も受けていない。いきなり『本日からお前は戦士だ』と通達されても困る。

「あたしはもうウガラ戦士なの？」

ウガラ仙人は頷いた。

「最後の試練を乗り越えればな」

「最後の試練とは？」

「儂を倒す事じゃ」

「師匠を倒す？」

「ウガラ戦士の師匠と弟子が同時に存在出来るのは、師匠と弟子の間柄である時だけじゃ。弟子が一人前のウガラ戦士になったら、師匠は退場せねばならん」

「師匠を倒せばあたしはウガラ戦士？」

「そういう事じゃ」

「師匠を倒せなかったら？」

「お前は死ぬ。儂はまた新たな弟子を探さなければならん。一からやり直しじゃな」

金田金子は頭を搔いた。

「……だったら、もう少し弟子のままでいた方がいい」

「何故じゃ？」

——死にたくないから。

「だって、その……、戦士っぽい事が何も出来ないから。ウガラボンバーとかいう技のやり方も、全然教わっていないし」

「やり方等ない。修行を終えれば、出来る様になっておるのだ」

金田金子は首を横に振った。

「無理無理！」

「儂を倒さないというのか？」

「倒せない。無理」

——糞爺を倒したいのは山々だけど。

「本当に倒さないのか？」

「倒せない。無理」

「本当に倒さないのか？」

「倒せない。無理」

「本当に倒さないのか？」

「倒せない。無理」

「倒さないと夜の相手を今後毎晩させるぞ」

ウガラ仙人は未だにEDだから、フィニッシュまでとにかく時間がかかる。

金田金子は首を振った。

「それでも倒せない。無理」

「そうか。では、仕方ない」

と、ウガラ仙人は呟くと、唱え始めた。「UGALA、UGALA、UGALA……」

金田金子は飛び上がった。

「師匠！ 止めて下さい！」

ウガラ仙人は、弟子の懇願を無視した。

踊り続ける。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

ウガラ仙人は唱えながら尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

「師匠！ 止めて下さい！」

と、金田金子は涙を流しながら訴える。

「UGALAボンバァーッ！」

と、ウガラ仙人は叫ぶと、金田金子に向かって両手を突き出した。手から青白い光線が発射される。

金田金子は腹部に光線を暗い、二〇メートル後方に吹っ飛ばされた。

――糞爺め、下らない事するな！

「師匠！ 止めて下さい！」

「儂を倒せ！」

「倒せない！ 無理！」

「儂を倒せ！」

「倒せない！ 無理！」

「儂を倒せ！」

「倒せない！ 無理！」

「倒さないと夜の相手を今後毎晩させるぞ」

「それでも倒せない。無理」

「そうか。では、仕方ない」

と、ウガラ仙人は呟くと、また唱え始めた。「UGALA、UGALA、UGALA……」

「師匠！ 止めて下さい！」

ウガラ仙人は、弟子の懇願をまた無視して踊り続けた。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

ウガラ仙人は唱えながら尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

「師匠！ 止めて下さい！」

「UGALAボンバーッ！」

ウガラ仙人は、弟子に向かって両手を突き出した。手から青白い光線が発射される。

金田金子は光線を顔面に暗い、五〇メートル後方に吹っ飛ばされた。

――糞爺め、いい加減にしろ！

「師匠！ 止めて下さい！」

「儂を倒せ！」

「倒せない！ 無理！」

「儂を倒せ！」

「倒せない！ 無理！」

「儂を倒せ！」

「倒せない！ 無理！」

「倒さないと夜の相手を今後毎晩させるぞ」

「それでも倒せない。無理」

「そうか。では、仕方ない」

と、ウガラ仙人は呟くと、また唱え始めた。「UGALA、UGALA、UGALA……」

「師匠！ 止めて下さい！」

ウガラ仙人は、弟子の懇願をまた無視して踊り続けた。

――仕方ない。とにかく、真似してみよう。

金田金子はふらつく足で立ち上がった。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

と、唱えながら尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

「やっと儂を倒す気になったか。結構だ。UGALA、UGALA、UGALA……」

――倒す気はあるけど、倒し方が分からないの。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「UGALAボンバァーッ！」

ウガラ仙人は、弟子に向かって両手を突き出した。手から青白い光線が発射される。

「UGALAボンバァーッ！」

金田金子は、師匠に向かって両手を突き出した。手が熱くなったと思ったら、青白い光線が発射される。

――え？

彼女の手から発された光線は、ウガラ仙人を目掛けて一直線に進んだ。

二本の光線の先端と先端が衝突する。

閃光と共に、光線は消滅した。

それと同時に、物凄い衝撃が加わる。

金田金子は勿論、ウガラ仙人ももんどり打って倒れた。

――さっきのは何？ どうやって光線を手から出せるようになったの？ あの変な踊りのお陰？ あの踊りを前からやっていればもっと前から光線を出せたの？ それだったら何故つまらない修行を続けさせたの？ それとも、修行を終えたからこそつまらない踊りだけで出せるようになったの？

金田金子は訳が分からなくなった。

三〇〇メートル先でウガラ仙人は起き上がった。額から一筋の血が流れ出ているにも拘わらず、ニヤリと笑う。

「糞女め、よくやるのう」

「糞女じゃない」

「師匠を倒せない弟子は糞じゃ。女だから、糞女じゃの。EDを治せない糞女じゃ。糞女だから治せないんじゃない。まともな女だったら、僕は今頃ビンビンになって、ガンガン射精しておる筈じゃ」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

ウガラ仙人は、金田金子を無視して踊り続けた。下手な歌も続ける。

糞、糞、糞、糞、糞女！

頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞女！

生み出せるのは糞しかない

糞、糞、糞、糞、糞女！

言う事やる事全て糞

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞に塗れて死ぬだろう

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞、糞、糞、糞、糞女！

「いい加減に糞女、て呼ぶのは止めて！」

と、金田金子は叫ぶと、踊って唱え始めた。「UGALA、UGALA、UGALA……」

「そうじゃ、糞女。儂を倒すのじゃ。ヒヒヒヒヒヒヒ。……UGALA、UGALA、UGALA……」

二人とも唱えながら尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「UGALAボンバァーッ！」

「UGALAボンバァーッ！」

二人は互いに向けて両手を突き出した。青白い光線が発射される。

二本の光線の先端と先端がまた衝突する。

先程より眩しい閃光と共に、光線は消滅した。

それと同時に、前回と比較して倍以上の衝撃が加わる。

金田金子もウガラ仙人も後方に吹っ飛ばされた。

――何故こんな事が出来るのか、相変わらず分からない。

「糞女め。まだやる気か？」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

糞、糞、糞、糞、糞女！

頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞女！

生み出せるのは糞しかない

糞、糞、糞、糞、糞女！

言う事やる事全て糞

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞に塗れて死ぬだろう

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞、糞、糞、糞、糞女！

「糞女じゃない！」

「糞女じゃないというのなら、儂を倒すのじゃ。儂を倒さぬ限り、儂はお前を糞女と呼び続けるぞ」

「糞爺め、ふざけやがって！」

と、金田金子は吼えりと、唱え始めた。UGALA、UGALA、UGALA……」

「そうじゃ、糞女。儂を倒すのじゃ。ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ。…
…UGALA、UGALA、UGALA……」

二人とも唱えながら尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「UGALAボンバァーッ！」

「UGALAスーパーボンバァーッ！」

二人は互いに向けて両手を突き出した。青白い光線が発射される。

二本の光線の先端と先端がまた衝突する。

先程より更に眩しい閃光と共に、光線は消滅した。

それと同時に、衝撃が加わる。

ウガラ仙人は後方に吹っ飛ばされた。樹木に叩き付けられる。

「グワッ」

金田金子は、前回と前々回が嘘だったかの様に、何の衝撃も感じなかった。

——あれ？ 何故何の衝撃も感じなかったの？

ウガラ仙人は息絶え絶えになりながら起き上がった。

「糞女め、UGALAスーパーボンバーを会得しておったか」

——いえ、会得した覚えなんて全然無いけど。

「しかし、UGALAスーパーボンバーだけで儂を倒せると思ったら大間違いじゃぞ、糞女め」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

糞、糞、糞、糞、糞女！

頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞女！

生み出せるのは糞しかない

糞、糞、糞、糞、糞女！

言う事やる事全て糞

「グオッ」

金田金子は、やはり何の衝撃も感じなかった。

ウガラ仙人は、血塗れになりながらも、笑顔になった。

「糞女め、なかなかやるな」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

糞、糞、糞、糞、糞女！

頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞女！

生み出せるのは糞しかない

——単に先に『UGALAスーパーボンバー』と言ったらどうなるのか、て考えただけよ。何を一々驚いてるの？

「あたしを糞女と呼ぶのは止めて」

ウガラ仙人は、地面にへたり込んだ。

「……もう呼ばん。いや、呼べん」

「何故？」

「儂は負けたからじゃ。お前は一人前のウガラ戦士じゃ」

何が何だか分からないが、修行を修了したのは分かった。

——良かった。もうつまらない修行を積まなくても済む。ED爺の夜の相手もしなくて済む。

「じゃ、あたしはブーガブーガ軍団と戦えるのね？」

ウガラ仙人は頷いた。

「充分戦える」

「じゃ、戦いに行く」

「ただし、道は険しいぞ」

「何故？」

「ブーガブーガ軍団はお前が思っている以上に強大なのだ」

「へえ。そう」

「ブーガブーガ軍団を甘く見るな。お前から会長令嬢と総帥夫人の座をいとも簡単に奪ったのだぞ」

「そうだったわね。気を付ける」

「ほれ、修了書じゃ」

と、ウガラ仙人はどこからかボロボロの紙切れを出すと、金田金子に押し付けた。

金田金子は、紙切れを広げた。

『あなたは、優秀で高貴で聡明なウガラ仙人による過酷な研修を見事修了された事を証します。
二〇××年×月×日。社団法人世界ウガラ仙人協会会長ウガラ仙人』

——こんなもん？　こんなの渡されても……。

「ありがとうございます、糞爺、じゃなくて、師匠」

ウガラ仙人は笑顔になり、磨り減った黄色い歯を見せた。

「良い後継者が出来た。これで僕は死ぬ。さらばじゃ」

と言うと、息を引き取った。

あまりにも突然の事だったので、金田金子は仰天した。

「え？　嘘」

ウガラ仙人の肩を掴み、揺さぶる。

老人は薄気味悪い笑顔のまま、肩をゆすぶられた。

「糞爺、何か言え！」

金田金子は、師匠の頬を叩いた。

ウガラ仙人は何の反応も示さない。アホ面で固まっているだけだ。高齢で体内水分量が少ない為、既に死後硬直が始まっているらしい。

「本当にくだばってる。信じられない。ま、いいか。山を降りよう。……そうか、このままじゃ駄目ね」

金田金子は、ウガラ仙人の袴を脱がせた。ボロボロで、流行遅れで、死ぬ程みっともないが、他に服が無いので止むを得ない。

真っ裸になった師匠を見下ろした。

骨と皮だけだ。既にミイラ化している。EDに苛まされていた男性自身は干からび、微風でたなびいていた。どこにあんな力を蓄えていたのだろう、と不思議に思う程貧弱な身体である。

金田金子は、師匠の袴を着た。

衣服を身に着けたのは、十数年振り。

糞弁護士と糞新総帥に下着を奪われてから、ずっと真っ裸で過ごしていた。

今更服を着るのも奇妙に感じたが、服を着ていないと下山出来ない。

――よし、これで一安心。

金田金子は、修行を積ませてくれた師匠に対し感謝の意を示す為に、遺体の顔面を跨ぐと思いきり排泄した。その後、糞尿塗れの遺体を肥溜めに蹴り落として埋葬する。

「さあ、行くわよ！」

と叫ぶと、金田金子は時速二〇〇キロで走って下山した。

BOOGAMANIA (015) : 帝国

ウガラ戦士金田金子は時速二〇〇キロで疾走し、山の麓にまで降りた。

町に辿り着く。

何の変哲も無い、ゴミみたいな寒村である。低層ビルであればまだ良い方で、殆どは耐用年数を前々世紀に迎えたと思われる屑家屋だ。

同じ時代に同じ地球上に高さ六〇〇メートル級の摩天楼が乱立する大都会がある一方で、こんな寂れた集落があるなんて信じられなかった。

こんな町に住みたがる奴は相当な間抜けだ、空爆して潰してしまえ、と金田金子は思った。

「ここはどこかな？」

現在地を示す標識は見当たらない。

前方から、皺塗れの老人が錆び塗れの自転車を漕いで向かって来た。

金田金子は手を振りながら自転車を止めた。

「ちょっと、止まって！」

「何やってる、糞野郎が！ 轢き殺されたいのか？」

と、老人は顔を真っ赤にして、鼻を飛ばす勢いで叫んだ。

修行を終えても『糞』と呼ばれるとは。

「あたしは糞野郎じゃない。女よ」

「嘘つけ。何故女が袴なんて着る？ しかもそんなボロボロで薄汚くて臭い袴を」

「他に服が無かったからしょうがないでしょ」

老人は、金田金子をじっと見つめていたが、

「そう言われてみると、女らしいな。糞女じゃ。自転車の前に飛び出しやがって。轢き殺されたのか」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

「糞、糞、糞、糞、糞女！」

と、老人は自転車に跨ったまま腰を振って踊った。

「あたしは糞女じゃない」

「糞、糞、糞、糞、糞女！」

と、老人は腰を振って踊り続けた。

「糞女じゃない！」

老人は、金田金子を無視して踊った。下手な歌も続ける。

糞、糞、糞、糞、糞女！

頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞女！
生み出せるのは糞しかない

糞、糞、糞、糞、糞女！
言う事やる事全て糞

糞、糞、糞、糞、糞女！
糞に塗れて死ぬだろう

糞、糞、糞、糞、糞女！
糞、糞、糞、糞、糞女！

金田金子は憤慨した。

何故山を下りたのにこの手の会話をしなければならないのか。

「とにかく、あたしはここがどこなのか知りたいの」

「ポレポレ県プルプル村じゃ」

「ポレポレ県？ 聞いた事ない」

金田金子は地理には学生時代から疎かったが（学生時代にあらゆるジャンルにおいて天才と謳われたのも、父親が学校に賄賂を渡して通信簿での評価を上げさせたから）、少なくともポレポレ県という地域がなかったのは辛うじて覚えている。「日本じゃないの？」

「昔は日本だった。今は大ブーガブーガ帝国だ」

「大ブーガブーガ帝国？」

「下劣で邪悪なブーガ神を絶対の神とみなすブーガブーガ軍団が支配する強盛国家だ」

「日本政府は？」

老人は鼻で笑った。

「あんな糞共、ブーガブーガ軍団によっていとも簡単に倒されたわい。議会で箸にも棒にもかからない事をグダグダ怒鳴り合ってるだけの阿呆共じゃったからの」

「じゃ、日本はブーガブーガ軍団によって支配されているの？」

「日本だけじゃないわい。極東アジア諸国、東南アジア、南アジア、ロシア……。全てがブーガブーガ軍団の手に落ちた」

金田金子の顎が落ちそうになる。

「そんなに？」

一〇年間、山で修行している間に世界がここまで激変を繰り返して来たとは予想外である。

「ブーガブーガ軍団は一大帝国を築いた。無論、満足はしていない。世界征服が最終目的じゃからの。世界がブーガブーガ軍団によって支配されるのは時間の問題だ」

「そんな訳ないでしょ」

「そうならないというのか？」

「そうよ。あたしが阻止するの」

「糞女のお前が、か？」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「あたしは糞女じゃない」

老人は、金田金子を無視して歌いながら踊った。

糞、糞、糞、糞、糞女！

頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞女！
生み出せるのは糞しかない

糞、糞、糞、糞、糞女！
言う事やる事全て糞

糞、糞、糞、糞、糞女！
糞に塗れて死ぬだろう

糞、糞、糞、糞、糞女！
糞、糞、糞、糞、糞女！

「下手糞な歌も踊りももういい！ あたしは糞女じゃない！」

「糞女じゃ。お前に何が出来る？」

「あたしはブーガブーガ軍団が信仰する下劣で邪悪なブーガ神に唯一対抗出来るウガラ神を信仰するウガラ戦士だから」

「聞いた事無いな。ウガラ神なんて。アホらしい名前だ。ブーガ神並にな」

思えば、彼女もウガラ神がどういった存在なのか、全く分からない。修行中、ウガラ仙人はそういう事に関して何の情報も提供しなかった。

何の為の修行だったのか。

「とにかく、あたしはウガラ戦士なの」

「そうかいそうかい。幸運を祈る。……BOOGA」

「何故『ブーガ』で言ったんですの？」

老人は怪訝そうに、

「僕は『ブーガ』なんて言っておらんわ。……BOOGA」

「また言ったじゃない」

老人は顔を真っ赤にして、

「言ってない！ ……BOOGA」

「ほら。また言った」

「言ってない！ ……BOOGA」

「言った」

「言ってない！ ……BOOGA」

「言った」

「言ってない！ ……BOOGA」

「言った」

老人は、顔を赤黒くして上下に飛んだ。

「言ってない、言ってない、言ってない！ ……BOOGA。僕が『ブーガ』なぜ言う訳がない。…
…BOOGA。僕はブーガ神なんて崇めていないからな。……BOOGA。だから『ブーガ』なんてい
う必要はない。……BOOGA」

「四回くらい言ったけど」

老人は、金田金子の指摘を無視し、その場を自転車にまたがったまま旋回した。

「僕は『ブーガ』なんて絶対言わんぞ。……BOOGA。何が『ブーガ』だ。……BOOGA。糞の役
にも立たない言葉ではないか。……BOOGA。言って何の意味がある？ ……BOOGA。言うのはア
ホではないか。……BOOGA。……BOOGA。……BOOGA。……BOOGAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！
」

と、奇声を上げると、金田金子に襲い掛かった。

金田金子はサッと避けると、唱え始めた。「UGALA、UGALA、UGALA……」

唱えるのと同時に尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

BOOGAMANIAを発症した老人は、アホらしい踊りに対しどう反応すれば良いのか分からず、馬鹿面でポーッと突っ立っていた。

金田金子は、両手を老人に向かって突き出した。

「UGALAボンバーッ！」

手から青白い光線が発される。

光線は、一直線に老人に向かい、胸部を直撃した。

「グオッ」

老人は、肉片と血漿を散らして後方へぶっ飛んだ。樹木に衝突するのと同時に二つに分かれ、それぞれが地面を打つ。ぴくりとも動かなくなった。

「あれ？」

ウガラ仙人も彼女も、UGALAボンバーを受けた時は吹っ飛ぶだけだったのに、この老人は死んでしまった。

UGALAボンバーは、修行者や戦士や仙人が受ける分にはダメージが少ないが、それ以外が受けると致命的になるらしい。倒され難いとされるBOOGAMANIA発症者も倒せる。

ウガラ戦士がどういった存在であるのか未だに理解出来ていないが、少なくとも戦う者として通用するのは分かった。

金田金子は、時速五〇〇キロで疾走した。

――あたしから何もかも奪った奴を傷め付けてやる。

と、誓いながら。

BOOGAMANIA (016) : 解任

ネズミコー・ゴウマン・インターナショナル・グループの裏切讓総帥は、我が世の春を謳歌していた。

ブーガブーガ軍団の助けを借りてネズミコー・グループとゴウマン・インターナショナル・グループを乗っ取って総帥に就任してからは、毎日の様に高い酒を飲み、美女を取っ替え引っ替えしてベッドインし、世界を飛び回って遊んでいた。

偶に大企業グループ総帥としての仕事をし、恩を売ってやったんだぞと威張り散らすブーガブーガ軍団の阿呆共と顔を合わさなければならなかったが、プラス面を考えればどうって事もなかった。

「讓ちゃん」

と、一糸纏わぬ超ウルトラスーパーナイスボディの女——見た目はいいが、頭はスカスカ——が、笑顔で駆け寄る。

裏切讓総帥は、笑顔で抱き付かれた。

「何だ？」

「今日ね、宝石店に行ったら物凄く可愛いネックレスがあったの！ 買って買って買って！」

「ああ、買ってやる、買ってやる」

と、裏切讓総帥は言った。

二日前に初めて会ったこの超ウルトラスーパーナイスボディの女も、飽きてきた。美女は三日で飽きると言うが、最近彼は二日、いや一日半で飽きていた。代わりがいくらでもいるからだ。

手切れ金代わりに何か買ってやろう、と思った。

「今行けない？」

「ん？ 今？ ああ、いいよ。何か着ろ」

超ウルトラスーパーナイスボディの女は、頷いた。

「うん。じゃ、何か着てくるね」

と言うと、隣の部屋に消えた。

デスクの電話が着信音を立て始めた。

裏切讓総帥は、渋々受話器を上げ、

「何だ？」

『あの……、総帥』

秘書の木村踏代だ。元愛人である。彼女は若干優秀だったので、飽きてからも秘書として手元に残っていた。飽きた愛人を捨てた後、次の愛人が到着するまで相手をしてもらってもいる。前総帥が起用していた黒人女性のオベッカ・ナンタラ程優秀ではなかったが、見た目は一〇〇倍も良い。何故前総帥があんなブス女を人として起用していたのか、さっぱり分からない。まさか頭脳を買っていたとは思えない。

「何だ？」

『その……、総帥とお会いになりたいと申している方が』

「誰だ？」

『えーと、その……』

いつもズグズグと本音を語る彼女が、言葉に詰まっているのは異常だった。

——一体誰だ？

「アポは取ってないんだな？」

『取っておりません。でも……』

「アポを取らせて後日来い、と言っておけ」

『……それは無理です』

「無理？ 何故だ？」

——またブーガブーガ軍団の阿呆共か？ 今度は何を要求しに来たのか。いい加減にしろ。俺はてめえらの打出の小槌じゃねえんだ。

『……それは……』

『……UGALA、UGALA……』

と、別の声が入ってきた。聞き覚えがある声だが、思い出せない。

『や、止めて下さい！』

『……UGALA、UGALA……』

『ヒイイイイイイーッ』

「お、おい！ どうした」

『UGALAボンバァーッ』

奇声と共に、秘書室と総帥室を隔てるドアが木っ端微塵になった。

「な、なっ！」

総帥室の壁はRPG-29ミサイルランチャーからのTBG-29V弾頭が炸裂してもびくともしない建材を使用している。扉もそれに準じる素材から成る。少なくともそこに転がっている人間が破壊出来る代物ではなかった。

……代物ではない筈だが……。

扉があった場所に、袴姿の人間が立っていた。

——何だこの爺は？

と、最初は思ったものの、よく見ると女性であるのが分かった。何となく見覚えのある女性。

——整形手術の跡が微妙に崩れかかった顔立ちの、辛うじて人並みの容貌……。

裏切讓総帥は愕然とした。

「お前、金田金子か？」

本来なら殺しておくべきだったが、真っ裸の、何の才能もコネも無い女一人を相手にそこまでしなくても、と甘く考え、山奥に捨てるだけに留めた。針の先程の知能もないから、山中をさまよった上でのたれ死にするだろう、と。一〇年間以上何の音沙汰もなかったもので、とっくに土に帰っている、とばかり思っていた。

金田金子は無言で総帥室に踏み込んだ。

「何しにここに来た？」

金田金子は裏切讓総帥の問いかけに答える事無く、唱え始めた。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

唱えるのと同時に尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

裏切讓総帥は、奇妙過ぎる舞踊を見て、呆れ返った。

「お前、何をやってる？ 下らない事は止めろ！」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

金田金子は、踊るのと唱えるのを止めなかった。更に尻を速く振り、舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

「下らない事は止めろ！」

金田金子は、両手を前に突き出した。

「UGALAボンバーッ」

手から青白い光線が発射される。

「なっ」

青白い光線は、裏切讓総帥の横を通り抜け、後方の壁を直撃した。

コンクリートブロックから構築された壁が爆発した。コンクリート破片を散らす。巨大な穴が誕生し、隣の部屋を覗けるようになった。

「ヒイイイイーッ」

着替え中の超ウルトラスーパーナイスボディの女が、悲鳴を上げる。上半身裸のまま、部屋から転げ出た。袴姿の女を見て、尋常でない状況に気付く。「讓ちゃん、その、また後でね。ネックレスは明日でいいから」

と言うと、あたふたと総帥室から逃走する。頭はスカスカでも、自己保存の意識だけは健在だ。スカスカだからこそ本能的に行動出来るのか。

――糞女め。女はどいつもこいつも糞だ。特に、目の前の女は……。

裏切讓総帥は、金田金子に目を向けた。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

と、彼女は唱えるのと同時に尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

「止めろ！」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「止めろ！」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「止めろ！」

「UGALAボンバァーッ」

金田金子は、突き出した手から青白い光線を放った。

裏切讓総帥の数ミリ横を通り抜けた光線は、後方の壁に当たった。

また爆発する。

裏切讓総帥は、コンクリート破片を頭から浴びた。鼻に粉塵が入り、くしゃみした。

「何をするんだ、糞女！」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女だ！」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女だ！」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女だ！ 糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

「糞女だ！ 糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない！」

「糞女だ！ 糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃない」

裏切讓総帥は、金田金子を無視して歌いながら踊った。

糞、糞、糞、糞、糞女！

頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞女！

生み出せるのは糞しかない

糞、糞、糞、糞、糞女！

言う事やる事全て糞

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞に塗れて死ぬだろう

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞、糞、糞、糞、糞女！

「あたしは糞女じゃない。……UGALA、UGALA、UGALA……」

「止せ！」

「止してもらいたいの？」

「ああ、止すんだ！」

「じゃ、あたしを糞女でない事を認めなさい」

「分かった、分かった。お前は糞女じゃない」

金田金子は、どこからか分厚い契約書を引っ張り出した。

「その旨を契約書に署名して誓いなさい」

裏切譲総帥は、足元に放られた契約書を拾った。

どのページも顕微鏡抜きでは読めないマイクロ文字でびっしりと書き込まれてあった。

「何だ、この契約書は？」

「あたしを糞女と呼ばない事を誓うものよ」

「こんなに分厚い契約書が必要か？」

「署名出来ないの？UGALA、UGALA、UGALA.....」

「署名する、署名する！」

裏切譲総帥は、デスクからパーカーのボールペン——実はナイジェリア製の偽物——を掴み、下に引かれた線の上に慌しく署名した。「満足か？」

金田金子は、契約書を回収すると、

「一応ね。さっさと返して」

「な、何を？」

「全部。ネズミコー・グループとゴウマン・インターナショナル・グループに、あたしの家に、実家に、車に.....。とにかく全て」

「何故お前に返さなきゃならないんだ？」

「だって、この契約書に署名したじゃん。ここに全て返す、て記載されてるけど」

「嘘つけ！」

金田金子は契約書の半分辺りを開き、上のパラグラフを指した。

「ここにきちんと明記してあるけど。読まなかったの？」

「読む訳ないだろう！」

「でも、法的にはきちんと読んで、納得した上で署名した事になる」

「そんなの有効なものか！」

「有効よ」

「有効じゃない！」

「有効よ」

「有効じゃない！」

「有効よ」

「有効じゃない！」

「そう。仕方ない。……UGALA、UGALA、UGALA……」

「止せ、止せ！ 分かった！ 有効だ！ 全て返す！」

後で取り返せば良いのだ。所詮出来の悪い糞女。隙はいくらでもある。

金田金子は納得して顔くと、

「そう。じゃ、あんたが着ている服も返して」

「で、でも！ これは自分の金で買った……」

「あたしから奪った財産から出したんでしょ？ だからあたしのものなの。返して」

「嫌だ」

「返して」

「嫌だ」

「返して」

「嫌だ」

「返して」

「嫌だ」

「じゃ、仕方ない。……UGALA、UGALA、UGALA……」

「分かった！ 服も返す！」

と、裏切讓前総帥は叫ぶと、服を脱いだ。下着姿になる。

後で取り返せばよいのだ。所詮糞女。隙はいくらでもある。

「下着も返して」

「これは俺の物だ！」

「あたしの物」

「俺の物だ！」

「あたしの物」

「俺の物だ！」

「あたしの物」

「俺の物だ！」

「じゃ、仕方ない。……UGALA、UGALA、UGALA……」

「分かった！ 下着も返す！」

裏切讓前総帥は叫ぶと、下着も脱いだ。真っ裸になる。

後で取り返せば良いのだ。所詮糞女。隙はいくらでもある。

金田金子は溜息をついた。

「なあんだ。しょぼいのね。よくそんなので女を取っ替え引っ替え出来たわね。ま、金に物を言
わせたんでしょうけど」

「勃起すると凄いんだ」

「勃起しても貧弱よ」

「凄いんだ！」

「貧弱よ」

「凄いんだ！」

「貧弱よ」

「凄いんだ！」

「貧弱よ」

「凄いんだ！」

「そう。仕方ない。……UGALA、UGALA、UGALA……」

「分かった！ 貧弱だ！ 勃起しても貧弱だ！」

「認めるならいいわ。で、教えて」

「な、何を？」

「ブーガブーガ軍団の本部を」

「何故そんな事を知りたい？」

「あたしから全てを失ったブーガブーガ軍団を野放しに出来ないでしょ。見付け出してぶっ潰す」

裏切讓前総帥は飛び上がって驚いた。

「馬鹿な事言うな！」

「馬鹿じゃない！」

「そういう意味じゃなくて……。下らない事するな。ブーガブーガ軍団を潰す？ お前に潰せる訳がない。いや、誰も潰せない。ブーガブーガ軍団は世界最強の勢力だ。ブーガブーガ軍団と比べたら、ギャラクターも大学生のサークル活動に過ぎない」

「最強だろうと何だろうと関係ない。とにかく潰すの。だから、本部の在り処を教えて」

「教えられない。教えたら殺される」

「あんたが何度殺されようと、こっちの知った事じゃない。だから教えて」

「断る」

「教えて」

「断る」

「教えて」

「断る！」

「そう。仕方ない。……UGALA、UGALA、UGALA……」

「教えられないんだ！」

と、裏切讓前総帥は唾を飛ばしながら叫んだ。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

金田金子は唱えるのと同時に尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

「止めろ！」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「教えられないんだ！ 止めてくれ！」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「教えたら俺は殺され……」

「UGALAデコピン！」

金田金子は、中指で裏切讓前総帥の額を弾いた。

「グオッ」

裏切讓前総帥は、壁に激突した。サッカーボールの様に跳ね返され、床に激突する。

「ブーガブーガ軍団の本部はどこにあるの？」

「教えられない！」

「教えて」

「教えられない！」

「教えて」

「教えられない！」

「そう。仕方ない。……UGALA、UGALA、UGALA……」

「教えられないんだ！」

と、裏切讓前総帥は意識が朦朧とする中叫んだ。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

金田金子は唱えるのと同時に尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

「止めろ！」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「教えられないんだ！ 止めてくれ！」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「教えたら俺は殺され……」

「UGALAホッペピン！」

金田金子は、中指で裏切讓前総帥の左頬を弾いた。

「ブワッ」

裏切讓前総帥は、首が一回転してしまうのでは、という衝撃を受けた。口の中で歯がボキボキ折れる。血を吹いた。床に鮮血の花が咲く。

「ブーガブーガ軍団の本部はどこにあるの？」

「プーカプーカ市だ」

金田金子は、首を捻った。

「プーカプーカ市？ どこよ、それ？」

「知らないのか？」

「ここ一〇年くらいウガラ戦士になる為の修行をしてたから、世界情勢に疎いの」

「プーカプーカ市は、昔で言う北京だ」

「韓国の方？」

「馬鹿！ 違う！」

「あたしは馬鹿じゃない」

「とにかく！ 韓国じゃない、中国だ」

「韓国も中国も似た様なもんでしょ。とにかく、北京にあるの？」

「そうだ。現在は大ブーガブーガ帝国の一地方都市に過ぎないが、とにかくそこにある」

「何故そこにあるの？」

「さあ。世界征服には大陸にあった方がいい、と考えたのでは？」

「北京。現在はプーカプーカね。分かった。嘘じゃないわね？」

「嘘じゃない」

「嘘ついてたらまたUGALAデコピンとUGALAホッペピンよ」

裏切讓前総帥は身震いした。

「嘘ついてない！」

「分かった。じゃ、さっさと失せて」

裏切讓前総帥は、よろめきながら立ち上がった。総帥室の外へ向かう。

「ちょっと。どこへ行くつもり？」

裏切讓前総帥は振り向いた。

「だから、ここから立ち去る……」

「エレベータか階段を使って？ 駄目駄目。ここはもうあたしの物なの。あんたに使ってもらいたくない」

「では、どうすればいいのだ？」

「窓から出て」

「馬鹿！ ここは五〇階だぞ！」

「あたしは馬鹿じゃない」

「ごめん。口が滑って……。とにかく、ここは五〇階だ。窓からは外に出られない」

金田金子は、窓に近付いた。ロックを解除し、開ける。

防弾仕様の窓が外に開く。風が進入し、デスクの上の書類を飛ばした。

「ここから出られるじゃん」

「だから言っただろ、ここは五〇階だ、て！ 外に出たら落ちて死ぬ！」

「落ちると死ぬの？」

「当たり前だ！」

「よく分かるわね。試してみたの？」

「試すまでもない！」

「やってみるまで分からないでしょ。さっさと出て」

「嫌だ！」

「出て」

「嫌だ！」

「出て」

「嫌だ！」

「そう。仕方ない。……UGALA、UGALA、UGALA……」

「出たくないんだ！」

と、裏切讓前総帥は叫んだ。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

金田金子は唱えるのと同時に尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

「止めろ！」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「出たくないんだ！ 止めてくれ！」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「出たら落ちて死ぬ……」

「UGALAホッペピン！」

金田金子は、中指で裏切讓前総帥の右頬を弾いた。

「ブワッ」

裏切讓前総帥は、首が一回転してしまうのでは、という衝撃をまた受けた。口の中で辛うじて残っていた歯がボキボキ折れる。血を吹いた。床に鮮血の花がもう一輪咲く。

「さっさと出て」

「嫌だ。死んじまう」

「じゃ、出るまでUGALAホッペピンかUGALAデコピンね」

「それも嫌だ！」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「止してくれ！」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

「死にたくないんだ！」

「UGALA、UGALA、UGALA……」

裏切讓前総帥は仕方なく窓に近付いた。

強い風で全身が冷える。

首を少し出し、下界に目を向けた。

ほんの三〇分前まで、五〇階からの眺めは爽快だったが、今は目が眩む光景でしかなかった。
下を行き交う車や人が、遥か彼方にある様に感じる。

男性自身が恐怖のあまり縮み込んで無くなった。尿意を催す。

「早く外に出て」

「駄目だ。エレベータを使わせてくれ」

「エレベータはあたしの物なの。あんたみたいな屑に使わせたくない」

「俺は屑じゃない」

「屑よ」

「俺は屑じゃない」

「屑よ」

「俺は屑じゃない」

「あ、そ。UGALA、UGALA……」

「分かった！ 俺は屑だ！」

「分かってくれればいい。さ、外に出て」

「階段を使わせてくれ」

「階段もあたしのもの」

「金なら出す」

「あんたはもう無一文なの。契約書に署名したんだから」

「死にたくないんだ！」

「死ね、とは言ってないでしょ。外に出て、て言ってるだけ」

「外に出たら死ぬ！」

「やってみなきゃ分かんないでしょ。……UGALAボンバーッ」

裏切讓前総帥の背中に、物凄い衝撃が加わった。蹴り出されるようにして窓枠を潜っていた。

UGALAボンバーの衝撃で、向かいにそびえる高層ビルにまで達するのでは、と思ったが、二〇メートル進んだ時点で急激に勢いが衰え、落下し始めた。下へと向かう勢いが増す。

「ヒイイイイイイイイイイイイイイイッ」

裏切讓前総帥は、号泣・失禁・脱糞しながら三〇〇メートル下の世界へ一直線に向かった。

* * *

金田金子は、三〇〇メートル下のアスファルト舗装面で赤黒い染みと化した裏切讓前総帥を、無表情で見下ろした。

何の感情も湧き上がって来ない。

ただ、ネズミコー・グループとゴウマン・インターナショナル・グループを奪還した、という事実だけが頭にある。

しかし、これでは満足出来ない。

全てを奪う事を画策したブーガブーガ軍団を殲滅しなければ。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

金田金子は唱えるのと同時に尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

「UGALAフライト！」

と、叫ぶのと同時に、外へ飛び出す。

裏切讓前総帥は、勢いを失った時点で落下し、死亡した。

金田金子は勢いを失うどころか上昇した。加速する。

マッハ二・五に達した。

衝撃波で、周辺のビルの窓を木っ端微塵にする。ガラス破片を浴びて怪我をする者が続出した

。

金田金子はそんな事にお構いなく、UGALAのパワーでプーカプーカへと飛び立った。